



『ショウ・ボート』の舞台。(写真提供：(公財) 富山市民文化事業団)

小藤田千栄子の ミュージカル・ダイアリー

267

富山から気合いの名作 『ショウ・ボート』登場

ス」(東京国際フォーラム ホールC)。2002年のロンドン初演作が、十数年の時を経て日本初登場。プロデュースリアンドリユー・ロイド・ウエバーということで話題を呼んだ作品であり、音楽をARラフマーン。のちに映画『スラムドッグ\$ミリオネア』で、さらに知られるようになった人だ。テーマは、大都市マンハイの、スラム街の再生。映画スターを夢見る青年(浦井健治)、映画監督志望の若い女性(すみれ)、インド映画界の大スター(朝海ひかる)などが中心。さらに再開発に関わっている弁護士(加藤和樹)がからんで、闇の世界もあぶりだしていく。

だが白人からは、全面的に支持されたわけではない。当時の時代状況が活写され、アメリカの正義について考えてしまいうミュージカルだった。山本耕史が熱唱。共演は濱田めぐみ、根岸季衣、吉原光夫、ジェロなど。演出・訳詞は吉川徹。

蜷川幸雄演出「リチャード二世」には圧倒された。さいたま芸術劇場内の、小劇場での公演で、中心は若手の「さいたまネクスト・シアター」だが同時に年輩陣の「ゴールド・シアター」も共演し、この共演ぶりが圧倒的だったのである。オープニングは、な

んと全員が車椅子で登場。イギリス王朝の話ゆえか、衣装は黒紋付きに、男は袴姿の正装。この人たちが、なんと突然に車椅子から降りて、タンゴを踊り始めるのだ。小劇場のフロアーが、和装のタンゴで埋まり、その動きの小気味いいこと。演劇の作り方って、

無限にあることを教えられたのだった。今号も作品が多かったの、仕上がりの良いものを中心に記述。先月号で掲載できなかった作品も加えた。

2月2日『メンフィス』(赤坂ACTシアター)。2010年のトニー賞の作品賞ほか受賞のミュージカル、日本初演。1951年のテネシー州メンフィス。ラジオ局の白人DJ(山本耕史)が、ラジオでブラック・ミュージックのレコードを流し、大人気となる。

2月9日『ラ・カーヂュ・オ・フォール』(日生劇場)。日本初演30周年の記念公演で、初演は東宝ミュージカルだったが、最近東宝/ホリプロの共同プロデュース。鹿賀丈史・市村正親コンビとしては3演目(2008&2012年)になる。やっぱ鹿賀丈史と市村正親のコンビは最高だ。いささかの年増感はあるものの、もう楽しいのなんの。ミュージカルを見る幸福感とは、これだ！という感じだった。初演からずっと出演という森公美子と真島茂樹、新納慎也など、お馴染みのメンバー。初演は息子役の相葉裕樹で、美男子ぶりが際立っていた。演出は山田和也。

と製作が変更してきているが、そのたびにタイトル表記が多岐異なる。今回は、ジャーニーWESTの桐山照史・神山智洋が双子の兄弟役で出演。2人とも、なかなか達人な役者ぶりで、とても良い舞台だった。ナレーター役の真琴つばさ(2003年版以来の出演)が、すっきりとカッコ良く、貧しい家庭の主婦ミセス・ジョンストン役のマルシアが、歌のうまさまで圧倒的だった。演出はグレン・ウォールフォード。

2月19日『パンティート』(日本青年館)。宝塚月組公演で、タイトルの正式表記は『Bandit』のようだ。サブ・タイトルで『義賊サルヴァトーレ・ジュリアーノ』と付く。月組の新進主演は、その昔、映画で見たことがある。『シシリーの黒い霧』(フランチェスコ・ロージ監督)や『シシリアン』(マイケル・チミノ監督)。いずれもこの人の行動の虚実を語ることに主題であったが、この宝塚版は、史実をベースに、うまくフィクションを交えたところが成功していた。

2月21日『黒豹の如く』(Dear DIAMOND!! 101カラットの永遠の輝き) (宝塚大劇場)。宝塚星組公演。柚希礼音・夢咲ねねの卒業公演で、大層な賑わい。高い期待度で空気が熱い。『黒豹の如く』は、作は柴田侑宏、演出・振付は謝珠栄。往年のスペインの海賊描写から始まる。抽象的な船のセットで、ダンス中心の見せ方。だがヒロインのあり方、敵役の登場など、本編の予告編的な味わいもある。

2月25日『ルパン三世―王妃の首飾りを追えー』(ファンシー・ガイ) (東京宝塚劇場)。宝塚雪組の『ルパン三世』が東京に登場である。やはり大変な人気で、ハード・チケットとなっていた。1月に大劇場で見たときよりも、ルパン三世(早霧せいな)が、さらに、はまっていたことに感心。特に、舞台を横切るときの(走り)がいいですね。カッコいい。運動能力の高い人なのだろう。

2月24日『クレイジー・フォー・ユー』(四季劇場・秋)。ずいぶん久しぶりに見た『クレイジー・フォー・ユー』だった。ほとんど新キャストになっていて、ポピー・チャイルド、松島勇気、ポリー・チャイルド、岡村美南。初演の演出を踏襲した作りで、とても上手に踏襲していることが分かった。今回の演出スーパードバイザーは加藤敬二、スーパードバイザー助手は中嶋徹。

2月18日『Golden Songs』(東京国際フォーラム ホールC)。梅田芸術劇場の10周年記念公演で、とても豪華なコンサートだった。梅田製作のミュージカルに出たことのある人は総出演の豪華さ。50音順に、安蘭けい/石井一孝/伊礼彼方/湖月わたる/姿月あさと/樹里咲穂/中川晃教/春野寿美礼/平方元基/マテ・カマラス/山崎育三郎。この日のゲストは一路真輝。この方たちが、梅田の舞台で歌った曲を次々と歌い継ぐのだ。もう知っている曲ばかりで、うれしいのなんの。他日のゲストは朝海ひかる・霧矢大夢・田代万里生・花總まり・城田優など。

2月19日『パンティート』(日本青年館)。宝塚月組公演で、タイトルの正式表記は『Bandit』のようだ。サブ・タイトルで『義賊サルヴァトーレ・ジュリアーノ』と付く。月組の新進主演は、その昔、映画で見たことがある。『シシリーの黒い霧』(フランチェスコ・ロージ監督)や『シシリアン』(マイケル・チミノ監督)。いずれもこの人の行動の虚実を語ることに主題であったが、この宝塚版は、史実をベースに、うまくフィクションを交えたところが成功していた。

2月21日『黒豹の如く』(Dear DIAMOND!! 101カラットの永遠の輝き) (宝塚大劇場)。宝塚星組公演。柚希礼音・夢咲ねねの卒業公演で、大層な賑わい。高い期待度で空気が熱い。『黒豹の如く』は、作は柴田侑宏、演出・振付は謝珠栄。往年のスペインの海賊描写から始まる。抽象的な船のセットで、ダンス中心の見せ方。だがヒロインのあり方、敵役の登場など、本編の予告編的な味わいもある。

2月25日『ルパン三世―王妃の首飾りを追えー』(ファンシー・ガイ) (東京宝塚劇場)。宝塚雪組の『ルパン三世』が東京に登場である。やはり大変な人気で、ハード・チケットとなっていた。1月に大劇場で見たときよりも、ルパン三世(早霧せいな)が、さらに、はまっていたことに感心。特に、舞台を横切るときの(走り)がいいですね。カッコいい。運動能力の高い人なのだろう。

3月10日『ウィズ・オズの魔法使い』(東京国際フォーラム ホールC)。翻訳・演出は宮本亜門の、2012年以後の再演。(スーパードバイザー・ミュージカル)と付いて、極彩色の、映像多用の作り方。

この日のドロシーは、AKB48の田野優花(ダブルで梅田彩佳)で、小柄な少女だった。初演以来のウィズ陣内智則、善い魔女2人、小柳ゆき、瀬戸カトリーヌなどが出てくると、私など安心するのだった。

3月12日・13日『ショウ・ボート』(富山/オーバード・ホール)。素晴らしい仕上がりだった。北陸新幹線の開通で、賑わいを増す富山だが、こんなに素晴らしいミュージカルを発信してしまうなんて、さなる素晴らしさだ。

オープニングから驚かせてしまう。カーテン前を、波止場の労働者が通過するなどの描写があり、本舞台が開くと早くもショウ・ボートそのものが登場。最初は舞台奥から正面向きで姿を見せるが、ついでシモテ側に90度回転すると、こんどは船の側面が見える。オーバード・ホールならではの、舞台機構のすごさを、早くも見せてしまうのだ。

時代は、1887年(明治20年)。ショウ・ボートの外側では切符販売。そこにギャンブラーのゲイロード(岡幸二郎)登場。早くも抜群の二枚目ぶりを見せ、長身が映える。声の良さが際立つのは言うまでもない。

このショウ・ボートは、船長夫妻(浜畑賢吉・末次美沙緒)が率い、芸人は、のちに黒人との混血と分かつて出ていくジュリー(剣幸)、ダンスが得意のコメディ・コンビ、フランク(本間憲二)、エリー(北村岳子)など。内働きの黒人は、台所担当のクイニー(田中利花)、あの有名な「オール・マン・リバー」を歌うジョー(長谷川大祐)。

ヒロインはマグノリア(土居裕子)は、ひと目でゲイロードに恋してしまい、母の反対を押しきって結婚。第2幕では、赤ちゃん誕生で、キム、K、I、Mと名付けられる。Kはケンタッキー、Iはイリノイ、Mはミズリーから取ったという。

ついでながら先だつて久しぶりにエドナ・ファーバーの原作を読んだら、最初にマグノリアが考えた、娘の名前は「ミシッピー」だったとか。成人したキムが、こんなことを言っていた。「もしミシッピーだったら、いまごろ私は、ミシイとか、シッピーとか呼ばれていた。」(大久保康雄訳/三笠書房刊)。

第2幕の始まりは1889年だが、10年後には夫妻は生活に困っている。ゲイロードは出て行き、マグノリアは、クラブ歌手のオーディションを受

ける。カゲで支えたのは、ショウ・ボートを出て行ったジュリーだった。1900年目前のニューイヤール・イヴの賑わいを経て、時は流れ、1927年、成長したキムはブロードウェイのスターになっていた。このような物語を、じつにうまく見せたポイントとは3つある。

まず第1は、富山で『ショウ・ボート』を上演するのだという気合い。これが大きい。まず最初に、大きなショウ・ボートが姿を見せたとき、もう「やりましたね」という感じ。気合い以外の何ものでもない。

第2にベスト・キャストを揃えたこと。富山のミュージカルは、まずは「剣幸」ありきなのだが、ジュリー役が、なんとも適役。マグノリアの土居裕子、ゲイロードの岡幸二郎、ダンス・コンビの本間憲二、北村岳子、重要なナンバーを歌う田中利花など、ベスト・キャスト揃い。そして言うまでもなく「オール・マン・リバー」を歌うベース歌手の長谷川大祐。

さらに成人したキムを演じた麻尋えりか(宝塚時代は麻尋しゅん)のスター性。ラスト近くに出てくるだけが、その姿の良さ、ダンス能力の高

さが圧倒的だった。他のシーンでは「アンサンブルで出ていたらしいのだが、それは分からなかった。」

そして第3に、細かい演出(ロジャー・カステヤノ)をあげておきたい。特に私が感心したのは、時の流れで、ホテルの回転ドアを回して歳月の流れを示し、さらに音楽と衣装で時代の変遷を示す。特にフラッパーの時代になったら、大人になったキムが登場したのだった。

私はうっかり「これ、富山だけの上演では、もったいないわね」と言ってしまったら、新幹線も開通したのだから、「富山に見にくればいいのですよ」と言われてしまった。確かに。再演はあるのか。

ついでながら『ショウ・ボート』の上演史を記すと、私が最初に見たのは、宝塚のパウホールだった。1986年1月。平みち時代の雪組で、マグノリアは神奈美帆。コメディ・コンビは、一路真輝と、小乙女幸。ジュリーは北斗ひかる。ジョーは飯かおるで、劇団内オーディションがあったという新聞記事を読んだ記憶がある。東京公演は翌1987年1月11日「ゆうぼう」と簡易保険ホール。ゲイロードは、第2幕ではヒゲを付けて登場し

た。なんだかレット・パトラーみたいと思ったのを憶えている。この後、中日劇場でも上演されたはず。

その後、2003年2月には、名古屋市青少年文化センター/アートピアホールでも上演されたようだが、これは見ていない。

富山版『ショウ・ボート』のチラシには「ハロルド・プリンス版/日本初演」と記されているが、そのハロルド・プリンス版は、1994年11月に見た。この時期、ブロードウェイには「グレン・クロウズ」の「サンセット大通り」が登場している、大層な賑わいだった。

『ショウ・ボート』は、客席2000席のガリッシュウィン劇場で、ここが満席だと、かなりの迫力。すごい装置で、例えていえば、東京宝塚劇場の両花道いっぱいまで飾りモノがあるという感じだった。ただしショウ・ボートそのものは、横向きの作りだけであった。

当時のNYタイムズのフランク・リッチ氏の記事によれば、『ショウ・ボート』に、これまで決まった台本はなかったのだそうで、ラストでキムが、こんなに活躍するのも初めてではなかったかと思う。振付はスーザン・ストローマン。

(映画・演劇評論家)